



家康公が広めた出版文化

徳川宗家十八代当主・静岡商工会議所最高顧問 徳川恒孝



駿河版『群書治要』（静岡県立中央図書館『葵文庫』収蔵）。家康公が林羅山らに命じて、銅活字で印刷し、元和2年（1616）5月完成。唐の名臣が勅命を奉じて多くの古典から政治の手本となる部分を抜粋して編纂したもので、日本の為政者にも大きな影響を与えた。全50巻。頼宣公が紀州に持参し、南葵文庫に保管されていたが、昭和3年に葵文庫に寄贈された。

群書治要序
秘書監鉅鹿男臣魏徵等奉勅撰
竊惟載籍之興其來尚矣左史右史記事記
言皆所以昭德塞違勸善懲惡故作而可紀
薰風揚乎百代動而不法炯戒垂乎千祀是
以歷觀前聖無運膺期莫不懍乎御朽自強
不怠乾乾夕惕義在茲乎近古皇王時有撰
述並皆包括天地牢籠羣有競採淨澁之詞

家康公の言葉に「人倫の道明かならざるより自ずから世も乱れ国も治らずして騒乱止む無し。この道理を論し知らんとならば書籍より外には無し。書籍を刊行し世に伝へんは仁政の第一也」というものがあります。

この言葉通り、家康公は関ヶ原の合戦の前年、伏見城で『貞観政要』『孔子家語』『六韜』『三略』『周易』など木活字による本の出版（伏見版）を進めました。

さらに大御所として駿府に移った後に、今度は銅活字を十萬強鑄させ、林羅山、金地院崇伝を中心に臨濟寺、清見寺などの僧侶を動員して『大蔵一覽』『群書治要』などの活字印刷本の刊行（駿河版）を続けます。銅活字の作成には朝鮮から来た技術者の力が大きく働いていました。

家康公の出版した本は、正しい政治のあり方、失敗した例などを

歴史の中から具体的に述べた史書が中心で、大変に現実的な本ばかりです。そしてこれらの出版にあたっては、正確を期すために、諸国の寺院、大名家に所蔵されてきた古本を筆写照合する膨大な作業もなされ、これらの貴重な原典の多くは後に江戸城内の紅葉山文庫に所蔵されました。

この紅葉山文庫は、日本の最初の国立図書館として江戸期を通じて発展します。幕末の蔵書数は十一万四千点で、その大半は現在、国立公文書館と宮内庁書陵部に所蔵・保管されています。

家康公の積極的な活字本刊行と出版事業の奨励は、平和の到来とともに大変な活字印刷の出版ブームを巻き起こし、儒書、史書、仏教の典籍、医学書などの出版が京都を中心に民

間の本屋の手によって盛んに行われました。

そして百年後の元禄時代には年間に四千点強の出版物が世に出ることになり、出版の中心も京都、大坂、江戸と広がりました。この時代になると、仮名交じり本や絵入りの本を印刷しやすい版木印刷が再び主流となり、読者は武家、公家、僧侶、神官、医者などの知識人層から、庶民・女性層に広がり、本の種類も、俳諧、百科事典、物語本、童話にあたる赤草子などの分野に広がりました。当時の世界で女性を含めて最も高い識字率を持った国は日本でした。

このように自由に本が出されることの大事さは本当に大きいものです。四百年まえに、書籍を刊行することが正しい政治の根幹である、と喝破した家康公は大変な方だったと思います。